

文の焦点から見たホドニとニヨッテ : 大蔵虎明 本狂言集を中心に

著者	李 淑姫
雑誌名	筑波日本語研究
号	6
ページ	117-138
発行年	2001-08-31
その他のタイトル	Conjunctives in Late Mdieval Japanese : From the Viewpoint of the Focus
URL	http://hdl.handle.net/2241/11117

文の焦点から見たホドニとニヨッテ

——大蔵虎明本狂言集を中心に——

李 淑 姫

キーワード：中世日本語、ホドニ、焦点、情報構造、階層

要 旨

大蔵虎明本狂言集にはニヨッテ、ホドニと関連して、以下のような構文が見られる。

1) この綱を引いたによつて、杖があたつたものじや (うり盗人)

2) こひのおもにといふ事が有程に、此文は恋の文である物じや (文荷)

これらを「pニヨッテqモノジャ」「pホドニqモノジャ」構文(p・qは命題)とよぶ。二種の構文はそれぞれニヨッテ句、ホドニ句を前件とし、[qモノジャ]を後件とする同一構造の複文のようにみえる。本稿では、一見同じ構造をもつようにみえるこれら二種の構文が異なる統語構造、意味構造、情報構造をもっていることを指摘する。本稿の考察によると「pニヨッテqモノジャ」「pホドニqモノジャ」構文の統語構造、意味構造、情報構造は次のようになる。

3) 「pニヨッテqモノジャ」

[[pニヨッテ qモノジャ] (統語構造)

qが表す事態の「原因」・行動の「理由」 (意味構造)

[pニヨッテ]は潜在的焦点位置になる (情報構造)

4) 「pホドニqモノジャ」

[[pホドニ qモノジャ]] (統語構造)

[qモノジャ]が表す判断の「根拠」 (意味構造)

[pホドニ]は潜在的焦点位置になることはできない (情報構造)

虎明本における両構文の構造の差は、階層論からみてニヨッテが中類、ホドニがC類に属するという立場と相通するものである。

1. はじめに

大蔵虎明本狂言集にはニヨッテ、ホドニに関して、以下のように同一の構造をも

つようにみえる例がいくつか見られる。

- 1) (男)がてん致た、此つなを引たによつて、つえがあたつた物じや、此つなをひけば、ぐなぐなとする程に (虎明本下、うり盗人(以下虎明本は省略))
- 2) (太郎冠者)いや思ひだいた、こひのおもにといふ事有程に、此文は恋の文である物じや (二郎冠者)げにもこひのおもにといふうたひ有程に、こひのぶんしやうがある物じや、おもひよ (中、文荷)

上の例文を次のように表す。

- 3) 「 p ニヨッテ q モノジャ」 (1の例、 $p \cdot q$ は命題)
「 p ホドニ q モノジャ」 (2の例)

本稿では、「 p ニヨッテ q モノジャ」「 p ホドニ q モノジャ」構文を情報構造、意味構造、統語構造から分析し、両構文の構造にどのような違いが見られるかを考察する。これによって次のことを明らかにする*1。

- 4) 「 p ニヨッテ q モノジャ」と「 p ホドニ q モノジャ」は情報構造、意味構造、統語構造が異なる。

5) 情報構造の差

- ① 「 p ニヨッテ q モノジャ」において、潜在的焦点位置は「 p ニヨッテ」にある*2。
- ② 「 p ホドニ q モノジャ」において、潜在的焦点位置は「 q モノジャ」にある。
「 p ホドニ」は前提であり、潜在的焦点位置になることはできない。

6) 意味構造の差

- ① 「 p ニヨッテ q モノジャ」において、「 p ニヨッテ」は q が表す事態の「原因」、あるいは行動の「理由」を表す。
- ② 「 p ホドニ q モノジャ」において、「 p ホドニ」は「 q モノジャ」が表す判断の「根拠」を表す。

7) 統語構造の差：両構文はそれぞれ次のように分析される。

①「pニヨッテqモノジャ」：[[pニヨッテq]モノジャ]

②「pホドニqモノジャ」：[[pホドニ][qモノジャ]]

小林1973によると、中世日本語の因由形式には10以上の形式がある。李1998では、中世日本語の諸因由形式の中で虎明本に多く用いられる「ホドニ、ニヨッテ、トコロデ、アイダ、ユエニ、ニヨリ」の6形式を考察対象とし、現代日本語における階層論に基づいて、中世日本語の因由形式に対する体系的説明を試みた。

本稿で考察するのは、「pニヨッテqモノジャ」「pホドニqモノジャ」構文であるが、このような「～モノジャ」構文は虎明本では「ニヨッテ、ホドニ」以外の因由形式には例がみられない。虎清本、天理本、山本東本などの調査でも、他の因由形式と一文の中で用いられる例はみられなかった。本稿で対象にするような「～モノジャ」構文の数自体が少ないということもあるが、「～モノジャ」構文の文体的性質の影響もあるのではないと思われる。李1998で考察の対象とした6形式のなかで、「アイダ、ユエニ、ニヨリ」は小林1973で文章語的なものと分類されたものである。一つの文の中で口語的性質をもつ「モノジャ」と文章語的性質をもつ「アイダ、ユエニ、ニヨリ」とは一文の中で共存しにくかったというのが、その理由の一つとして考えられる。ただし「トコロデ」との関係も含め、立ち入った考察は別稿にゆずる。

2. 「pニヨッテqモノジャ」構文の「モノジャ」について

2. 1. 先行研究

中世日本語の因由形式に関連した研究には、小林1973をはじめ多数のものがあるが、「pニヨッテqモノジャ」「pホドニqモノジャ」構文を直接対象にした研究はみられない^{*3}。

本稿で考察する「pニヨッテqモノジャ」「pホドニqモノジャ」構文に用いられる「モノジャ」と関連しては福田1998の考察がある。福田1998はこのような「モノジャ」を現代日本語の説明のモダリティの一つである「理由を特立するノダ」に相当するものと見ている。中世の「モノジャ」を説明のモダリティとして認めるかどうかに関してはより立ち入った考察が必要であるが、それは別稿にゆずることに

し、本稿では、福田1998のように「モノジャ」を現代日本語の「ノダ」のような説明のモダリティと認める立場から考察を進める。

2. 2. 「モノジャ」について

中世日本語における「モノジャ」の用法に対して詳細に述べることは播くが、考察の前提として、どのような類の「モノジャ」が「pニヨッテqモノジャ」「pホドニqモノジャ」に用いられるものであるのかについて簡単に述べたい。

- 8) (すつば)さりながら、太刀を持なをいた程に、是は身が物じや(下、ながみつ)
- 9) (医師)そうべつ針はいたひもので御ざる、こらへさせられひ (中、かみなり)
- 10) (孫一)か様の事はかた時もいそひだがよひものじや、さらはかうおじやれ
(上、やくすい)
- 11) (大名)はじめ有事が、後までもあるものじや程に、きやつがきくやうにく
わをいわふ (上、鼻取ずまふ)
- 12) (居杭)いやされは、是に有よ、なんぞ、いやづきんじや、是をきたらは、
あたまをはらるるともくるしうあるまひと思しめしてくだされたものじや
(下、いぐい)
- 13) (主)して太刀は (太郎冠者)や、ござらぬ (主)さたのかぎりじや、さいぜ
んのものにとられた物じや、なんとしてよからふ (上、しんばい)
- 14) (武悪)物申とあるは、太郎くわじやが声じやが、たのふだ人より使にきた
物じや (上、ぶあく)

虎明本に用いられる「モノジャ」には現代日本語の「モノダ」に重なる様々の用法がある。まずその語構成において、現代日本語の「モノダ」のように虎明本の「モノジャ」も、「モノ+ジャ」に分けられるもの(例8)とモダリティ化したとみられるもの(例13、14)とがある。二語に分けられるものと、モダリティ化したとみられるものとは連続性があり、上の9)10)の例にみるように判定するのが難しいものも多い。意味的な面からみても「事物+断定」(例8)、「当為、当然」(例11)など現代語の「モノダ」と通じる例が多い。

虎明本に用いられる「モノジャ」は意味上、現代日本語の「モノダ」に対応するものが多いが、上の12)13)14)の例にみるように、「モノダ」と訳するよりも「ノダ」

と訳するのがより自然な例もある。福田1998の指摘にあるように、「何らかの事態をまず提示し、それに対する背景を説明する場面で用いられる例」である。「pニヨッテqモノジャ」「pホドニqモノジャ」に用いられる「モノジャ」もこの類のものであると考えられる。

現代語において「ノダ」は説明のモダリティとして位置づけられる。本稿では、考察の対象とする「pニヨッテqモノジャ」「pホドニqモノジャ」構文に用いられる「モノジャ」を、現代語の「ノダ」のように「何らかの事態に対して説明をするモダリティ」として考えて考察を進める。

以下3節では、虎明本に現れる「pニヨッテqモノジャ」「pホドニqモノジャ」構文の諸例を示す。

4節では、いくつかの例を対象に、両構文がどのような情報構造をもっているのかを考察する。既知の情報・未知の情報、前提・焦点という情報価値の中で、ニヨッテ句、ホドニ句がどのような情報価値をもっているのかということを明らかにする。

5節では、ニヨッテ句、ホドニ句がq、あるいは[qモノジャ]に対してどのような意味関係にあるかについて考察する。ニヨッテ、ホドニは原因・理由をあらわす接続形式であるから、まず因果関係という大きな意味範疇が考えられる。本稿ではこの因果関係の中で下位カテゴリーを設定し、そのカテゴリーをもって両構文の意味構造を分析する。

ニヨッテ、ホドニは前件と後件を因果関係で接続する必然確定条件形式である。ニヨッテ句、ホドニ句を前件(条件句)とすると、それらを承ける後件(帰結句)はqである可能性もあり、[qモノジャ]である可能性もある。

6節では、ニヨッテ句、ホドニ句を承ける後件(帰結句)がqであるか、[qモノジャ]であるかを分析し、両構文の統語構造の差を明らかにする。

7節では、階層的観点からみたニヨッテ句、ホドニ句の統語的特徴を分析し、その結果を4、5、6節での考察結果と照らし合わせる。両構文が情報構造、意味構造、統語構造からみて相違することを明らかにし、これをB類としてのニヨッテ句、C類としてのホドニ句の統語的特徴と照らし合わせる。

3. 「pニヨッテqモノジャ」と「pホドニqモノジャ」構文の例

虎明本に現れる「pニヨッテqモノジャ」と「pホドニqモノジャ」構文の全用

例を以下に示す*4。

3. 1. 「pニヨッテqモノジャ」構文(5例)

- 15) (鬼)あらきどくや、はなのさきにあるものを、あみひで、たれもなひといいふたは不善な、思ひ出ひて候、かくれみのかくれがさをきたによつて、あ見なんだものじや、尤じや、みのもかさもぬげ (中、せつぶん)
- 16) 〈つえでたたく、きもをつぶし、たつて〉(男)これはいかな事、さてさて今のはふしぎな事じや〈つなを引てみてわらふて〉(男)がてん致た、此つなを引たによつて、つえがあたつた物じや、此つなをひけば、ぐなぐなとする程に (下、うり盗人)
- 17) (主)やらふしぎや、さいさい太郎くわじやがもどるが、いや、思ひ出いた、いつもの所へ使にやるたびに、きげんをとりて、酒をのまする、今のませぬに依てもどつた物じや、やいやい (中、ぬけがら)
- 18) (亭主)やらふしぎや、うらに人かげがみへた、たれもゆかぬか、さてはぬす人であらふ程に、うらへ人をまはせ、ひるなかににくひ事じや〈といふ、きき付てめいわくしてかがむを、ていしゆみ付、それじやといふて、ないないほんさんをもらわれたれども、やらぬに依て、盗にわせた物じや、さんさんなぶつてやらふと存ると云て、かき山ぶしのことく、色々なぶる (下、ほんさん)
- 19) 〈～二人のもの、やいたのふだ人のかけが、さかづきにうつつてみゆるは、何とした事ぞ、いやさけをぬすむかと思ふてきつかひをめさるるに依て、しうしんがきたものじや、ただうたへといひて～〉 (上、ばうしばり)

3. 2. 「pホドニqモノジャ」構文(5例)

- 20) (太郎冠者) いや手桶のこともいりませひで、命をたすかつたをよひにしてにげてまいつてござるが、あとでははりりとくひはるをとがしてござる程に、さだめてかみはつたもので御ざらふ (中、しみづ)
- 21) (太郎冠者) やいやいいかふおもひな〈たじたじする〉(二郎冠者) 誠に文一つのおもからふしさひはなひが、いかふおもひやひ〈たじたじする〉(太郎冠者) いや思ひだいた、こひのおもにといふ事が有程に、此文は恋の文

である物じや

(中、文荷)

22) (二郎冠者) げにもこひのおもにといふうたひが有程に、こひのふんしやうがある物じや、おもひよ

(中、文荷)

23) (下京の女) ~又上京に手かけをもつておかれたが、上京へ参ると申されたほどに、さだめてそれへ参られたもので御ざらふ、あれへ尋ねにまいらふと存る、参ほどに是じや、物申

(中、どん太郎)

24) (備手) おもてにもものまうが有が、そんじやう其声じやが、多分時分がらじや程に、さん用をせいと云事にわせたものじや、留守をつかはふ

(下、八句連歌)

上の例の中で、「pニヨッテqモノジャ」構文では15)16)、「pホドニqモノジャ」構文では20)21)の例をとりあげ、両構文の情報構造、意味構造、統語構造を比較、考察する。

4. 情報構造の比較

4節では、「pニヨッテqモノジャ」「pホドニqモノジャ」構文のニヨッテ句、ホドニ句が構文の中でどのような情報価値をもっているかを比較、考察する。すなわち、前提(既知の情報)、焦点(未知の情報)という観点からみたとき、それぞれの因由句はどのような情報価値をもつかということを明らかにする。

4. 1. 「pニヨッテqモノジャ」の情報構造

4. 1. 1. 「かくれみのかくれがさをきたニヨッテ~」の情報構造

25) (鬼) ものまふ《たそと云てあくるまねして、みまはし、たれもなひといいて、下にある》(鬼) あらきどくや、はなのさきにゐるものを、あみひで、たれもなひといいたは不審な、思ひ出ひて候、かくれみのかくれがさをきたによつて、あ見なんだものじや、尤じや、みのもかさもぬげ (中、せつぶん)

鬼が人間の家を訪ねたが、出てきた女には鼻の先にいる鬼が見えない。鬼はそれを不審がるという場面である。

ニヨッテ句が「pニヨッテqモノジャ」構文の中でどのような情報価値をもつのかをみるために、話者である鬼が上の文を発話する状況を考えてみる。

①鬼は自分が相手に見えていないことを知っている。したがって「え見なんだ」が「既知の情報」で「前提」になる。

②なぜ見えないのかを不審に思い、女に自分が見えないという事態の原因を探す。「え見なんだ」という事態の原因が話者の関心事であり、この原因が「文の焦点」である。ニヨッテ句は「文の焦点」が存在し得る「潜在的焦点位置」になる。したがって、文の情報構造は次のようになる。

26) <u>かくれみのかくれがさをきたによつて</u>	<u>え見なんだ</u>	ものじゃ
潜在的焦点位置	前提(既知の情報)	

4. 1. 2. 「此つなを引たニヨッテ～」の情報構造

27) 〈つえでたく、さもをつぶし、たつて〉(男)これはいかな事、さてさて
今のはふしぎな事じゃ〈つなを引てみてわらふて〉(男)がてん致た、此つな
を引たによつて、つえがあたつた物じゃ、此つなをひけば、ぐなぐなとする
程に (下、うり盗人)

男が夜中に瓜を盗みにきたが、隠れていた瓜畑の主が杖で男をたたく。杖でたたかれたことに驚いた男が、誰もいないのになぜ杖があたつたのかと考える場面である。発話の状況は次のようになる。

①男は誰もいないのに、自分に杖があたつたことに驚いている。したがって、「つえがあたつた」は男の「既知の情報」で、「前提」になる。

②「つえがあたつた」という既知の事態の原因探しが話者の関心事であり、その原因が「文の焦点」となる。ニヨッテ句はこの「文の焦点」が存在し得る「潜在的焦点位置」になる。したがって、情報構造は次のようになる。

28) <u>此つなを引たによつて</u>	<u>つえがあたつた</u>	物じゃ
潜在的焦点位置	前提(既知の情報)	

他の「pニヨッテqモノジャ」構文も同様に分析される。すなわちqが「既知の情報」で「前提」になり、「pニヨッテ」が「潜在的焦点位置」になる。

pニヨッテ	q	モノジャ
潜在的焦点位置	前提(既知の情報)	

4. 2. 「pホドニqモノジャ」の情報構造

4. 2. 1. 「はりはりとくひはるをとがしてござるホドニ～」の情報構造

29) (太郎冠者) いや手桶のこともいりませひで、命をたすかつたをよひにしてにげてまいつてござるが、あとではりはりとくひはるをとがしてござる程に、さだめてかみはつたもので御ざらふ (中、しみづ)

清水を汲みに行った太郎冠者が鬼に出くわし手桶も忘れて逃げてきた。手桶をどうしたかという主人の質問に答える場面である。

「pニヨッテqモノジャ」構文においてはqが「既知の情報」を表していた。「pホドニqモノジャ」構文ではどのような構造になるのだろうか。

「さだめて」を「もので御ざらふ」と呼応するものとみると、例文29)においてqが表す事態は「かみわつた(噛み割った)」である。しかし「pニヨッテqモノジャ」構文の場合と異なり、例文29)において「かみわつた」は既知の情報ではなく、太郎冠者が下す「判断の内容」である。太郎冠者の「既知の情報」は、「あとではりとくひはるをとがしてござる」である。「あとで～ござる」は太郎冠者の作り話ではあるが、少なくとも話者である太郎冠者はこの情報を「既知のもの」として扱っている。太郎冠者はこの既知の情報を前提に「qモノジャ」という判断を未知の情報(新情報)として提示しているのである。構文の発話状況は次のようになる。

①後ろでバリバリと食い割る音がした。これが既知の情報で前提になる。

②この構文においては、①の既知の情報、すなわち「後ろでバリバリと食い割る音がした」という既知の情報の「原因」をさがすことが話者の発話の目的ではない。

③①を前提に「そこから考えられる(手桶に関する)事態に対する判断」を行うことが太郎冠者の発話の目的である。したがって「文の焦点」は「(手桶に関して)考

えられる事態に対する(推量)判断」を表す[qモノジャ]の方にあり、[qモノジャ]が「潜在的焦点位置」を表すことになる。判断の前提である[pホドニ]が潜在的焦点位置になることはできない。

30) <u>はりはりと～をとがしてござる程に</u>	<u>さだめてかみはつたもので御ざらふ</u>
前提(既知の情報)	潜在的焦点位置

4. 2. 2. 「こひのおもにといふ事が有ホドニ～」の情報構造

31) (太郎冠者) やいやいいかふおもひな <たじたじする> (二郎冠者) 誠に文一つのおもからふしさひはなひが、いかふおもひやひ <たじたじする> (太郎冠者) いや思ひだいた、こひのおもにといふ事が有程に、此文は恋の文である物じや (中、文荷)

主人の手紙を届けに行く途中、手紙が重いという想定で太郎冠者と二郎冠者がふざけあっている場面である。

例文31)において、qが表す事態「此文が恋の文であるということ」は、太郎冠者に与えられた既知の情報ではなく、太郎冠者が行う「判断の内容」である。例文31)の中での太郎冠者の発話の目的は「此文に対して何らかの判断を下すこと」である。したがって、その判断の内容が「文の焦点」になり、その判断を表す[qモノジャ]が「潜在的焦点位置」となる。[pホドニ]は[qモノジャ]という判断を下すための前提として提示されているものである。情報構造は次のようになる。

32) <u>こひのおもにといふ事が有程に</u>	<u>此文は恋の文である物じや</u>
前提	潜在的焦点位置

他の「pホドニ qモノジャ」構文も同様に分析される。すなわち、[pホドニ]は[qモノジャ]という判断を下すための前提になり、[qモノジャ]は潜在的焦点位置になる。[pホドニ]が潜在的焦点位置になることはできない。

<u>pホドニ</u>	<u>qモノジャ</u>
前提	潜在的焦点位置

5. 意味構造の比較

5節では、両構文の中のpとqの意味関係を考察する。ニヨッテ句、ホド二句が構文の中でqあるいは[qモノジャ]とどのような意味関係にあるのかということを観察する。

ニヨッテ、ホド二という原因・理由を表す接続形式が承接していることから、ニヨッテ句、ホド二句は後件とある種の因果関係にあることには間違いない。この因果関係に一定の下位のカテゴリーを設定し、この中のどのようなカテゴリーが適用されるかを考えてみたい。

田窪1987では、現代日本語の理由を表す接続助詞「カラ」に、「行動の理由(事態の原因)」を表す「制限的カラ」と「判断の根拠」を表す「非制限的カラ」の二種類があるという見解を提示している*⁵。本稿では「ニヨッテ句が表す因果関係」と「ホド二句が表す因果関係」の違いを考察するのに、田窪1987の提案する二種類のカラの分類が有効であると考え、5節では、ニヨッテ句、ホド二句がqあるいは[qモノジャ]に対して、「行動の理由・事態の原因」としての意味関係にあるのか、「判断の根拠」としての意味関係にあるのかという観点から両構文を比較、考察する。

5. 1. 「pニヨッテqモノジャ」構文の意味構造

5. 1. 1. 「かくれみのかくれがさをきたニヨッテ～」の意味構造

例文15)25)において、ニヨッテ句「かくれみのかくれがさをきたニヨッテ」は、qが表す事態「あ見なんだ(見ることができない)」の原因になるのか、あるいは「あ見なんだものじゃ(見ることができないだろう)」と鬼が判断する「根拠」となっているのか。

4.1.1. でみたように、話者である鬼は「あ見なんだ」という既知の情報を前提にし、その事態の「原因」を探そうとしているのであり、それをニヨッテ句が表している。ニヨッテ句は「あ見なんだ」という事態の原因である。15)25)の意味構造は次のようになる。

33) <u>かくれみのかくれがさをきたによつて、あ見なんだ</u>	ものじゃ
事態の原因	事態

5. 1. 2. 「此つなを引たニヨッテ～」の意味構造

4.1.2. でみたように、例文16)27)において、話者である男には「つえがあたつた」という事態は「既知の情報」である。男はそれを前提にして既知の事態の「原因」を探そうとしているのである。ニヨッテ句「此つなを引たニヨッテ」は、q が表す事態、「つえがあたつた」という事態の「原因」になる。16)27)の意味構造は次のようになる。

34) 此つなを引たによつて、つえがあたつた 物じや
 事態の原因 事態

他の「p ニヨッテ q モノジャ」構文も同様に分析される。すなわち、[p ニヨッテ]はq が表す事態の「原因」、あるいはq が表す行動の「理由」である。

本稿では、因果関係を①事態の原因・行動の理由、②判断の根拠に下位分類した。

5.1. でみたように、ニヨッテ句は「①事態の原因・行動の理由」を表す。

例文15)16)19)におけるニヨッテ句は、q が表す事態の「原因」になる。例文17)18)のニヨッテ句は、q が表す行動の「理由」になる。それぞれの例文のニヨッテ句が「事態の原因」を表すか「行動の理由」を表すかというのはq の意味内容によるものである。

5. 2. 「p ホドニ q モノジャ」構文の意味構造

5. 2. 1. 「はりはりとくひはるをとがしてござるホドニ～」の意味構造

例文20)29)において、ホドニ句「あとではりはりとくひはるをとがしてござるほどに(後ろでバリバリと食い割る音がしたから)」は、「かみはつた(手桶を噛み割った)」という鬼の行動の理由(事態の原因)にはならない。太郎冠者は「バリバリと音がしたから噛み割った」ということを述べているのではない。ホドニ句は、話者である太郎冠者が「(手桶は)(鬼が)噛み割ったのだでしょう」と判断(この例では推量判断)するための「根拠」となっている。20)29)の意味構造は次のようになる。

35) はりはりと～をとがしてござる程に さだめてかみはつたもので御ざらふ

判断の根拠

判断

5. 2. 2. 「こひのおもにといふ事が有ホドニ～」の意味構造

例文21)31)において、ホド二句「こひのおもにといふ事が有ほどに」はqが表す事態、「此文が恋の文である」という事態の原因・理由になるのではない。「この文が恋文である」ことの理由が「恋の重荷という言葉があるから」にはならないのである。ホド二句は、話者である太郎冠者が下す「判断(此文は恋の文である物じや)の根拠」になっている。

36) こひのおもにといふ事が有程に 此文は恋の文である物じや

判断の根拠

判断

他の「pホドニqモノジャ」構文も同様に分析される。すなわち[pホドニ]はqが表す事象の原因ではなく、[qモノジャ]が表す話者の判断の「根拠」である。

6. 統語構造の比較

情報構造や意味構造が明らかにされると、ニヨッテ句、ホド二句がqあるいは[qモノジャ]とどのように関わっているのかが分かってくる。6節では、ニヨッテ句、ホド二句の係り先がqなのか[qモノジャ]なのかを明らかにし、両構文の統語構造の違いを示す。

6. 1. 「pニヨッテqモノジャ」構文の統語構造

6. 1. 1. 「かくれみのかくれがさをきた二ヨッテ～」の後件

5.1.1. でみたように、例文(15)(25)(33)のニヨッテ句「かくれみのかくれがさをきたによつて」は「あ見なんだ」という事態の原因である。ニヨッテ句は「あ見なんだものじや」の条件句ではなく「あ見なんだ」の条件句(必然確定条件句)であり、「あ見なんだ」を帰結句としている。(15)(25)(33)の統語構造は次のようになる。

- 37) かくれみのかくれがさをきたによつて み見なんだものじや
 前件(条件句) 後件(帰結句)

6. 1. 2. 「此つなを引たニヨッテ～」の後件

5.1.2. でみたように、例文16)27)34)のニヨッテ句「此つなを引たによつて」は q が表す事態、「つえがあたつた」という事態の原因である。ニヨッテ句は「つえがあたつた」の条件句(必然確定条件句)であり、「つえがあたつた」を帰結句としている。16)27)34)の統語構造は次のようになる。

- 38) 此つなを引たによつて つえがあたつた 物じや
 前件(条件句) 後件(帰結句)

他の「p ニヨッテ q モノジャ」構文も同様に分析される。すなわちニヨッテ句[p ニヨッテ]は q が表す事態の原因を表す必然確定条件句であり、q はそれに対する帰結句である。「p ニヨッテ q モノジャ」構文は、ニヨッテ句[p ニヨッテ]が前件(条件句)、q が後件(帰結句)という文の構造になっている。

6. 2. 「p ホドニ q モノジャ」構文の統語構造

6. 2. 1. 「はりはりとくひはるをとがしてござるホドニ～」の後件

5.2.1. でみたように、例文20)29)35)のホドニ句「はりはりとくひはるをとがしてござる程に」は q が表す事態である「(鬼が手桶を)かみはつた」ことの原因・理由にはならない。話者である太郎冠者が「かみはつたもので御ざらふ」と判断(この例では推量判断)するための条件を提示しているのである。したがって、ホドニ句は q の条件句でなく[q モノジャ]の条件句であり、[q モノジャ]がその帰結句になる。

- 39) はりはりと～をとがしてござる程に さだめてかみはつたもので御ざらふ
 前件(条件句) 後件(帰結句)

6. 2. 2. 「こひのおもにといふ事が有ホドニ」の後件

5.2.2. でみたように、例文21)31)36)のホドニ句「こひのおもにといふ事が有程に」は「此文は恋の文である」の原因にはならない。「この文が恋文である」ことの条件が「恋の重荷という言葉があるから」ではないのである。ホドニ句は、話者である太郎冠者が「この文が恋文である」ということに対して何らかの判断(この例では断定判断)を下すための条件を提示しているのである。すなわちホドニ句は、qの条件句ではなく[qモノジャ]の条件句であり、[qモノジャ]がその帰結句になる。

40) 「こひのおもにといふ事が有程に」 「此文は恋の文である物じや」

前件(条件句)

後件(帰結句)

他の「pホドニqモノジャ」構文も同様に分析される。すなわち[pホドニ]を前件(条件句)とし、[qモノジャ]を後件(帰結句)とする複文構造である。

7. 階層論からみた両構文の統語構造

7. 1. B類のニヨッテとC類のホドニ

李1998では、南1974の階層論的観点から、「従属句の述部」と「包含関係」をもとにニヨッテ句をB類、ホドニ句をC類に分類した。このような観点から「pニヨッテqモノジャ」「pホドニqモノジャ」構文の構造はどのように分析されるだろうか。

南1974の階層論では従属句の構成成分をもとに従属句を階層的に分類している。この分類によると、述部にモダリティ成分がない従属句はB類、モダリティ成分がくる従属句はC類と分類される。このような観点から分類されたB類の従属句とC類の従属句は様々な面で異なる振る舞いをみせる。その中の一つに、それぞれの従属句が連体修飾成分の構成成分になるか否かというものがある。B類は連体修飾成分の構成成分になり、C類はその構成成分になることができない。

本稿では「pニヨッテqモノジャ」「pホドニqモノジャ」構文に用いられる「モノジャ」を現代日本語の「ノダ」のようなモダリティと考えてきた。連体修飾成分とニヨッテ句・ホドニ句との関係を考察するため、ここでは「モノジャ」の語構成を「名詞モノ+断定ジャ」として考える。すなわち、「pニヨッテqモノジャ」「p

ホドニqモノジャ」構文の中の「モノジャ」を「モノ+ジャ」と考え、構文の中のニヨッテ句、ホドニ句が「名詞モノ」とどのような関係にあるのか考察しようということである。

B類の従属句は連体修飾成分の構成成分となり、名詞を修飾することができる。C類の従属句は連体修飾成分の構成成分になることはできない。前述したように、李1998ではニヨッテ句をB類、ホドニ句をC類に分類した。この分類に従うと、ニヨッテ句はB類であるから[pニヨッテq]という連体修飾成分(ここでは連体修飾句)を構成し、名詞「モノ」を修飾することができる。しかしホドニ句はC類であるから、[pホドニq]という連体修飾成分を構成することはできない。

「pニヨッテqモノジャ」構文において[pニヨッテ]はqが表す事態の原因、行動の理由としてqを制限修飾する。ニヨッテ句はqを制限修飾し、[pニヨッテq]という連体修飾句として「モノ」を修飾するのである。「pホドニqモノジャ」構文において[pホドニ]はqの原因ではないので、qを制限修飾することはできない。ホドニ句は非制限的修飾句である。ホドニ句は[pホドニq]という連体修飾句を構成することはできない。これは違う観点からみると、ニヨッテ句、ホドニ句が「モノ」のスコープ(作用域)の中にあるか否かということと通じるものである。

「モノジャ」を「名詞モノ+断定ジャ」とし、ニヨッテ句をB類、ホドニ句をC類として両構文の統語構造を考えると、次のようになる。

41)「pニヨッテqモノジャ」構文の統語構造：[pニヨッテ q]モノジャ
制限的修飾句

モノのスコープに入る

42)「pホドニqモノジャ」構文の統語構造：[pホドニ] [qモノジャ]

非制限的修飾句

モノのスコープに入らない

7. 2. 構造分析のまとめ

7.1.では、ニヨッテ句がB類、ホドニ句がC類という階層的観点から「pニヨッテqモノジャ」と「pホドニqモノジャ」の両構文の統語構造を考察した。これを4、5、6節で考察した両構文の情報構造、意味構造、統語構造(前件と後件の関係からみた統語構造)と照らし合わせてみると、その特徴が重なり合うことがわか

る。以下にそれぞれの観点からみた両構文の構造分析の結果をまとめて提示する。

43) 情報構造

①「pニヨッテ q モノジャ」: [pニヨッテ]は潜在的焦点位置になる。

q は前提、既知の情報である。

[pニヨッテ] q]モノジャ

潜在的焦点位置 前提

②「p ホドニ q モノジャ」: [p ホドニ]は潜在的焦点位置にならない。

[p ホドニ] [q モノジャ]

前提 潜在的焦点位置

44) 意味構造

①「pニヨッテ q モノジャ」: [pニヨッテ]は q の原因・理由を表す。

[pニヨッテ] q]モノジャ

q の原因

②「p ホドニ q モノジャ」: [p ホドニ]は[q モノジャ]の判断の根拠を表す。

[p ホドニ] [q モノジャ]

[q モノジャ]の根拠

45) 統語構造(前件と後件)

①「pニヨッテ q モノジャ」: [pニヨッテ]の後件(帰結句)は q である。

[pニヨッテ] q]モノジャ

前件(条件句) 後件(帰結句)

②「p ホドニ q モノジャ」: [p ホドニ]の後件は[q モノジャ]である。

[p ホドニ] [q モノジャ]

前件(条件句) 後件(帰結句)

46) 階層論からみた統語構造

①「pニヨッテ q モノジャ」: ニヨッテ句はB類。

[pニヨッテ]は q の制限的修飾句。

[p ニヨッテ]は「モノ」のスコープに入る。

[p ニヨッテ q]モノジャ

制限的修飾句

②「p ホドニ q モノジャ」：ホドニ句はC類。

[p ホドニ]は非制限的修飾句

[p ホドニ]は「モノ」のスコープに入らない。

[p ホドニ] [q モノジャ]

非制限的修飾句

8. 結論と課題—ニヨッテの階層の変化と「モノジャ」の役割

本稿では、「p ニヨッテ q モノジャ」と「p ホドニ q モノジャ」が情報構造、意味構造、統語構造の面から相違することを明らかにし、これがB類としてのニヨッテ句、C類としてのホドニ句の特徴と重なることを確認した。これを以下に図にまとめる。

47)「p ニヨッテ q モノジャ」「p ホドニ q モノジャ」構文の構造

	[p ニヨッテ q]モノジャ	[p ホドニ] [q モノジャ]
統語構造	前件(条件句) 後件(帰結句)	前件(条件句) 後件(帰結句)
情報構造	潜在的焦点位置	潜在的焦点位置
意味構造	q の原因・理由	[q モノジャ]の根拠
階層構造	ニヨッテ句はB類・制限的修飾句	ホドニ句はC類・非制限的修飾句

本稿では、ニヨッテ句がB類、ホドニ句がC類という李1998の結論から出発する方式ではなく、それぞれの例文が属する文脈の中から「p ニヨッテ q モノジャ」「p ホドニ q モノジャ」構文におけるニヨッテ句、ホドニ句の役割を導き出す方式を用いた(4、5、6節の考察)。それによって、虎明本の「モノジャ」構文においてニヨッテ句、ホドニ句が用いられる意味論的意義がより明らかにされたと思われる。また、虎明本のニヨッテ句がB類、ホドニ句がC類に分類されるという李1998の結論が他の角度からも確認されたと思われる。

虎明本、虎清本、天理本にみられる「p ニヨッテ q モノジャ」構文の諸例はニヨッテ句が制限的に用いられるものであったが、山本東本の「p ニヨッテ q モノジャ」

構文の中には非制限的に用いられるニヨッテ句の例もある。

- 48) (太郎冠者)あまり鬼がけわしゅう追っかけまするによって、振り返って、鬼のつらと存ずるところへ、桶をほうど投げ付け、あとをも見ずして逃げて参りましたが、あとで、バリリバリリと音が致しましたによって、桶はさだめて噛み砕いたものでござろう。(清水、山本東本)

李1998では、虎寛本のニヨッテ句の述部に推量の助動詞がくる例があることから、ニヨッテ句の階層がB類からC類へと変化した可能性について言及したが、48)の例もニヨッテ句の階層の変化と関連していると思われる。ニヨッテ句の階層の変化の問題は、狂言台本だけでなく考察の対象となる資料をより広げて考えていきたい。

また、この問題は因由形式の階層の変化だけでなく、説明のモダリティとしての「モノジャ」の発達と関連して考えていく必要がある。本稿では「モノジャ」を説明のモダリティと考えて論を進めたが、「モノジャ」が説明のモダリティとして用いられた時期、中世日本語における「モノジャ」の機能などに対してはより立ち入った考察が必要であると思われる。今後の課題としたい。

注

注1) 本稿では「情報構造、意味構造、統語構造」という用語のもとで、以下のことを考察する。

- 1) 情報構造：前提(既知の情報)、焦点(未知の情報)という情報価値を文のどの成分が担っているのかをみる。主にニヨッテ句、ホド二句がどのような情報価値をもっているのかという観点から考察する。
- 2) 意味構造：前件と後件の間に成立する因果関係について考察する。因果関係の中でも、田窪1987のカラの二分類にならって、「行動の理由(事態の原因)」と「判断の根拠」の二つの下位カテゴリーの中で考える。
- 3) 統語構造：ニヨッテ句、ホド二句を前件(条件句)とすると、これを承ける後件(帰結句)はqなのか[qモノジャ]なのかということを考える。構文の前件と後件の関係、条件句と帰結句の関わり方を分析する。

注2)「潜在的焦点位置」というのは、そこに焦点があたることが可能な場所、「焦点化可能な位置」ということである。潜在的焦点位置のどこに焦点があたるかは文脈によってきまる。
(田窪1987、p37参照)

注3) 小林1973では、上接語と後件の種類という観点から虎明本のホドニとニヨッテを比較している。小林1973によると「推量・意志・希望を表す助動詞群」はホドニの上接語にくることはできるが、ニヨッテの上接語にくることはできない。また、ホドニの後件には「推量・意志・命令・依頼」がくることができ、ニヨッテの後件にはこれらがくることができないという制約がある。諸先行研究については李1998を参照されたい。

注4) このような例は虎明本だけでなく虎清本、天理本、版本狂言記、山本東本にも見られる。

- 1) シテあの酒へ写つたは、頼ふだ人ではないかと云時 シウ主退くべし 此酒を、飲ませとむないと、思わるるによつて頼ふだ人の、心が此壺の中へ、来た物であらうと云 (棒縛、天理本)
- 2) 身共が申は、角よりしては、いくつなるらんと云時、二九と言われたは、角から十八間目じゃによつて、二九と言われた物であらう (にく十八、天理本)
- 3) 太郎「いやおもひだいた。こいのおもにといふ事があるほどに。此文はこいのふみであるものじや (文にない、虎清本)
- 4) 二郎「けにも。こいのおもにといふうたいがあるほどに。こいのぶんしやうがあるものじやをいよ (文にない、虎清本)
- 5) (シテ)やいやいあれを見よ。頼ふた人のかけか壺の中へうつる。ふしきな事の。身共の存るは、しわい人しやによつて此やうにしはつておいてもまた酒をぬすんてのむかとおもはるる執心か是へうつる物であらう (棒縛り、続狂言記)
- 6) イヤ随分、おむつからぬように大切にお守を致しますが、私を見つけさせられませぬによつて、それゆえおむつかるものでござらう (廻鞠、山本東本)
- 7) これはいかなこと、小さい音じゃ。さりながら今のはつぶてが小さいによつて、音も小さいものであらう。(鐘の音、山本東本)
- 8) (次郎冠者)某が思うは、いつもお留守になると、兩人して酒を盗んで飲むによつて、それゆえいましめられたものであらう。(棒縛、山本東本)
- 9) (鬼)これはいかなこと。鼻の先に居る某が見えぬそう。ハハアそれぞれ、みどもは、この隠れ笠・隠れ蓑を着ているによつて、それゆえ見えぬものであらう。(節分、山本東本)

注5) 田窪1987の指摘のように、現代日本語においてはモダリティの助動詞に「ノ」が承接することで、因由句が制限的に用いられていることがより明らかになる。

(田窪1987, pp43-44参照)

- 1) [太郎がいるから、花子はアメリカへ行く]のだろう (制限的、行動の理由)
- 2) 太郎がいるから、[花子はアメリカへ行く]だろう (非制限的、判断の根拠)

高山1990は、現代日本語における田窪1987の考察を受けて、中古の日本語においてもこのような区別がなされていた可能性について言及している。高山1990によると中古の日本語においては「連体ナリ」が田窪1987でいう「ノ」のような役割をしている。たとえば「連体ナリ」が推量の助動詞「ム、メリ、ベシ」などに上接すると、これらの助動詞は「原因理由推量」を表すようになる。

- 3) 普通、ム、メリ、ベシといった形式は単独で「原因理由推量」をあらわすことはできない。ところが、連体ナリに下接した時、「原因理由推量」をあらわすことが可能になるのである。まさに、連体ナリの手を借りて「原因理由推量」を実現していると言っている。

(高山1990, p22)

次の例は高山1990であげている「原因理由推量」の例である。

- 4) 詳しく言ひつづけんのことごとしきさまなれば、漏らしてけるなめり
(源氏物語、賢木)
- 5) 鹿をさして馬といふ人有りければかもをもをしと思ふなるべし
(藤原仲文、拾遺集535)

中古の日本語の因由形式「已然形+バ」の場合も、現代日本語の「カラ」のように「行動の理由」として制限的に用いられるものと、「判断の根拠」として非制限的に用いられるものがあり、「連体ナリ」によってそれが区別された可能性がある。

本稿で見るように、虎明本のニヨッテ・ホドニに関しては「事態の原因・行動の理由としてのニヨッテ」、「判断の根拠としてのホドニ」のような図式が成立する。しかし本稿で考察の対象にしたのは、「pニヨッテqモノジャ」「pホドニqモノジャ」構文の中でのニヨッテ句、ホドニ句だけである。「モノジャ」構文以外（たとえば「pニヨッテq」「pホドニq」、「pニヨッテqコトジャ」「pホドニqコトジャ」）においてもそのような図式が成立するののかに対してはまた別の考察を要する。今後の課題としたい。

参考文献

虎明本：『大蔵虎明本狂言集の研究』上・中・下、池田廣司・北原保雄著、表現社
虎清本：『狂言古本二種』古川久編、わんや書店

(林田明、『虎清本狂言(翻字編)』『近代語研究』第三集を参照した。)

天理本：『狂言六義全注』北原保雄・小林賢次著、勉誠社

正篇：『絵入狂言記』万治三(1660)年刊(『狂言記の研究』北原保雄・大倉浩著)

続篇：『続狂言記』元禄十三(1700)年刊(『続狂言記の研究』北原保雄・小林賢次著)

拾遺：『狂言記拾遺』享保十五(1730)年刊(『狂言記拾遺の研究』北原保雄・吉見孝夫)

外篇：『新版絵入狂言記 外五十番』元禄十三(1700)年刊(『狂言記外五十番の研究』)

山本東本：『狂言集』上・下、日本古典文学大系、岩波書店

(検索には国文学研究資料館の『日本古典文学本文データベース(実験版)』
を参照した。www.nijl.ac.jp/databases/databases.htm 参照)

大倉浩(1997)「語法・用語から見た『狂言記外篇』—三百番集本系の曲の位置付け—」

『文芸言語研究 言語篇』31

尾方理恵(1993)「『から』と『ので』の使い分け」『国語研究』松村明先生喜寿記念会編

小林千草(1973)「中世口語における原因・理由を表す条件句」『国語学』94

高山善行(1990)「ラムの特殊性をめぐる—くコトをくくる機能—の潜在—」

『日本語学』9-5

田窪行則(1987)「統語構造と文脈情報」『日本語学』6-5

田野村忠温(1990)『現代日本語の文法Ⅰ—「のだ」の意味と用法—』和泉選書48

永野賢(1952)「『から』と『ので』とはどう違うか」『国語と国文学』29-2

野田春美(1997)「『の(だ)』の機能」くろしお出版

福田嘉一郎(1998)「説明の文法的形式の歴史について—連体ナリとノダー—」

『国語国文』67-2

南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店

吉本啓(1993)「日本語の文階層構造と主題・焦点・時制」『言語研究』103

李淑姫(1998)「大蔵虎明本狂言集の原因・理由を表す接続形式について」

『筑波日本語研究』3号

(2001年6月28日 受理)